

β -グルクロニダーゼ

(β -D-Glucuronidase glucuronohydrolase: E. C. 3. 2. 1. 31)

from *Pomacea canaliculata*

Type A- I

Activity 22.000

Fishman units/ml

Fishman unit : pH 5.1、37°C で1時間に 1 μ g のフェノールフタレインを、基質フェノールフタレインモノグルクロナイドより遊離させる酵素量を 1 Fishman 単位とする。

[特 長]

β -グルクロニダーゼは、グルクロン酸抱合体の加水分解を触媒する酵素で、哺乳動物のほとんどの組織、細菌にいたるまで広く分布し、特に軟体動物の消化液中に高い活性を有することが以前より知られていました。各種アミノ酸、ステロイド類の抱合体の加水分解酵素として、研究及び臨床検査への広い応用が報告されています。

本製品はスクミリンゴ貝の消化液より精製しました β -グルクロニダーゼで、下記の特性を有し、他の起原の本酵素に比べ、各方面への応用で勝れた成績を得ることができます。

1. 熱安定性が極めて高い。
60°C、3時間の加温でもほとんど失活しません。
2. 基質特異性は広く、ステロイドグルクロン酸抱合体への親和性が高い。
3. 硫安けんだく液状で、必要な酵素量をピペットで採り出し使用できる。
4. pH 4.2 を至適 pH に持つが、厳密な pH 調整をせずとも、使用可能です。

[使 用 例]

1. 尿中 17-ヒドロキシコルチコステロイド (17-OHCS) グルクロン酸抱合体の水解 : pH 5 に調整した尿 1 ml に対し、本酵素を 300~400 単位加え、60°C、1 時間加温して下さい。
2. 尿中 17-オキシステロイド (17-OS) グルクロン酸抱合体の水解 : pH 5 に調整した尿 1 ml に対し、本酵素を 600~800 単位加え、60°C、2 時間加温して下さい。

[保存及び安定性]

本製品は、極めて安定な酵素ですが、2~8°C で保存して下さい。濁りを生じていても活性に影響はありませんので、上清をそのまま御使用下さい。

[文 献]

- 1) P. Bemfeld, J.S. Nisselbaum and W.H. Fishman., J.B.C., 202, 763 (1953)
- 2) T. Tsukada, M. Isoe and M. Yoshino., C.C.A., 160, 245 (1986)
- 3) 石田孝その他、臨床化学、15, 13 (1986)



製造元

株式会社 日本バイオテスト研究所

〒185-0002 東京都国分寺市東戸倉 1-15-3

TEL. 0423-21-0921(代)